「神を欺く」　　２０２６年１月４日　主日礼拝
使徒言行録　第５章１～１１節

２０２６年、新しい年が始まりました。昨年１２月の１ヵ月間は、クリスマスを迎えるにあたりルカによる福音書からご一緒に学んでいましたが、年が明けましたのでまた使徒言行録に戻って学んでいきたいと思います。

さて、聖書の中にはたいへんわかりにくい箇所がいくつも出てきます。今日のこの箇所もとても分かりにくい箇所です。この問題は、土地を売ったお金が誰のものかという所有の問題ではなく、土地を売ったお金に執着する人間の心の問題なのです。自分が持っていた土地を、神様との関係の中で考えようとしなかったアナニアとサフィラは、土地を売った代金をごまかし、その一部だけを持ってきてそれが全部だと言い張りました。土地を売ったお金は神様のものではなく、自分たちのものだ。そう言い張ったところに彼らの問題がありました。

ギリシア語で罪のことを「ハマルティア」と言います。これは、もともとは「的外れ」という意味です。弓矢から放たれた弓が的に向かっていかないで外れていく。的外れ。この的というのは神様のことを表しています。私たちの心や目が、的である神様から外れていく。的外れ。これを聖書では罪と呼ぶのです。

ヨシュア記７章には「アカンの罪」という箇所があります。モーセの後継者であるヨシュアに導かれて神の約束の地カナンへと入っていったイスラエルの民がアイという町に攻め上りますが敗退してしまいます。ヨシュアが神様に向かってなぜですかと問うと、主なる神様はこう答えます。ヨシュア記７章１１節、【イスラエルは罪を犯し、わたしが命じた契約を破り、滅ぼし尽くしてささげるべきものの一部を盗み取り、ごまかして自分のものにした。だから、イスラエルの人々は、敵に立ち向かうことができず、敵に背を向けて逃げ、滅ぼし尽くされるべきものとなってしまった。もし、あなたたちの間から滅ぼし尽くすべきものを一掃しないなら、わたしは、もはやあなたたちと共にいない。立って民を清め、『明日に備えて自分を聖別せよ』と命じなさい。イスラエルの神、主が、『イスラエルよ、あなたたちの中に滅ぼし尽くすべきものがまだ残っている。それを除き去るまでは敵に立ち向かうことはできない』と言われるからである。】

イスラエルの中にある滅ぼし尽くすべきもの。直接的には、敵から奪い取った分捕り品のことを指します。罪を犯したアカンはヨシュアにこう告げます。「わたしは、確かにイスラエルの神、主に罪を犯しました。わたしがしたことはこうです。分捕り物の中に一枚の美しいシンアルの上着、銀二百シュケル、重さ五十シュケルの金の延べ板があるのを見て、欲しくなって取りました。今それらは、わたしの天幕の地下に銀を下に敷いて埋めてあります」。アカンは神様に献げたものに手をつけたのです。

主なる神様は、イスラエルの民がアイの町に攻め入る前、エリコを滅ぼした時、ヨシュア記６章１８節でこう命じています。【あなたたちはただ滅ぼし尽くすべきものを欲しがらないように気をつけ、滅ぼし尽くすべきものの一部でもかすめ取ってイスラエルの宿営全体を滅ぼすような不幸を招かないようにせよ。】　この命令にアカンは背いたのです。

アカンの罪は、神様に献げたものに手を付けた罪ですが、同時に彼は、滅ぼし尽くすべきものを滅ぼし尽くさなかった罪を犯したのです。ここで、滅ぼし尽くすべきものとは分捕り品のことですが、神様は敵からの分捕り品を滅ぼし尽くすことによって、同時にその

分撮り品に心が奪われ、惜しむ心で一部をかすめ取ってしまうようなその思い、そのやましい心をすべて滅ぼし尽くせ、とおっしゃっておられるのではないでしょうか。滅ぼし尽くすべきものは分撮り品ではなく、神に献げたはずのその分撮り品を惜しむ心、その一部をかすめ取りたいという思いこそ、滅ぼし尽くされなければならないのです。そしてこの出来事と同じことが、今日の聖書の箇所でアナニアとサフィラの上に起こりました。

今日の聖書の箇所の出来事が記されているのは、使徒言行録５章です。使徒言行録は、これまで初代教会が順調な歩みを行ってきたと報告しています。使徒言行録２章では天から聖霊なる神様が降ってくるペンテコステの出来事が記されています。ペンテコステの際、ペトロの説教を聞いた人々の中から多くの人たちが新たに仲間に加わりました。初代の教会の人たちは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心でした。外に向かって伝道しなくても人々が集まってきたのです。３章ではペトロとヨハネが「美しい門」で物乞いをしている人に向かって、「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と言うと、その人は立ち上がり、踊りながら神を賛美し始めます。その出来事に驚いた民衆に向かって、ペトロはイエス様の十字架と復活の説教を始めます。人々がそれに聞き入っていると、そこにやってきた祭司やサドカイ派の人たちがペトロとヨハネを捕まえてしまいます。それが４章です。ところが、議会に引き出されたペトロとヨハネは、「わたしたちが救われるべき名は、天下にイエス・キリストのほかには与えられていない」と大胆に語りました。さらに彼らは、議会に向かってこう語ったのです。「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてみてください」。こうして釈放されたペトロとヨハネはみんなのもとへと帰っていき、その出来事の報告をしました。そして４章の終わりでは、自分たちの持ち物をみんなで持ち寄って、必要に応じて分配するという、原始共産制のような暮らしぶりが報告されています。こうして見てみますと、聖霊が降った２章から４章にかけて、祭司やサドカイ派の人たちから妨害を受けることもありましたが、それにも負けずに初代教会の歩みは順調に進んでいったようすが伺えます。

ところが、その順調な時にたいへんなことが起こるのです。しかもそれは、外からきた迫害ではなく、教会の中にいる人たちから所有をめぐる問題として現れてきたのです。所有をめぐる問題は、罪の問題と結びついています。神の所有を否定して、自分の所有を主張する。これは神への信仰を揺るがすとても大きな出来事なのです。私たちの命は神様がくださったものです。私たちの持ち物、私たちの人生も、すべてが神様のものなのです。自分のものはすべて神様のものである。本来ならそうであるはずなのに、いつのまにか、神様のものが自分のものになってしまう。神の所有権を忘れることで、神御自身を忘れてしまって生きている私たちがいるのです。私たちは今日、この出来事が、初代教会の歩みが順調にいき始めたときに起こった出来事だということを覚えておきたいのです。

キリスト教においてもっとも大事なことは、神を神とすること。神様を認め、神様を敬い、私たち人間はその神様から造られた被造物であることを認めること。そこが崩れてくると、私たちは、自分の力によって今の自分があると勘違いしてしまうのです。そしてそれは、初代教会での出来事のように、すべてが順調にいっているときこそ、大きな誘惑に駆られるのです。すべてが順調に進んでいるとき、私たち人間は、順調に進んでいるすべてのことが、まるで自分の力ですべてを得たことのように過信し、本当はそれらすべてが

神様からいただいていることを忘れてしまいます。そうすると、神さまからいただいているものを神様にお返しすることがもったいなくなり、ごまかしてしまうのです。自分の心をだまし、神様をもだましてしまう。ここに大きな誘惑、罠があります。そうやって私たちの目や心が神から離れていくとき、それが的外れとなって私たちを罪に陥らせるのです。このように物事が順調に運んでいる時こそ、慎重になって、神様から心が離れないように、的外れにならないように注意をする必要があるのです。

昨年、たくさんの恵みをいただいた私たちは、この新しい年を迎えた今こそ、新たに神様に心を向けながら、神様を欺くことなく歩んでいきたいと願います。

お祈りしましょう。